



AJEL

日本ラテンアメリカ学会 会 報



AJEL

2005年11月20日

No. 88

1. 理事会報告

○第113回理事会

2. 第27回定期大会開催について
3. 研究部会開催のお知らせ
4. 学術交流
5. 近著紹介
6. 事務局から

1. 理事会報告

日時：10月1日（土）14：00～17：00

場所：上智大学2号館8階815-b会議室

出席者：遅野井（理事長）、宇佐見、落合、
岸川、小泉、辻、幡谷（書記）、堀
坂、松下

欠席者：加藤、鈴木、畑

<報告事項>

(1) 理事長より学会事務センター破産問題
につき報告があった。①第4回債権者集会（6月15日、新木運営
委員出席）和解成立の報告があり、裁判長より破
産業務が完了したとの宣言がなされた。②第3回連絡協議会（7月16日、理事長
出席）

- ・4月11日の参議院決算委員会で本件
が取り上げられ、学会事務センター
が「文部科学大臣の承認手続きを経
ずに長期借入れを行い、無断流用の
上、事実について平成14年度まで財
務書類に計上していなかった」こと
が明らかになった。文科省が「同セ
ンターから報告を受けるまで財務状
況の問題点を認識していなかったこ

とはゆゆしき問題」として、決議(6
月7日)により、文科省は同センター
の破産に至る経緯と監督の実態につ
いて、国会に報告を行う義務を負う
ことになった。

- ・6月17日文科省との面談をもち情報
の公開を求めた。
- ・10月にも文科省の報告が国会になさ
れる予定であるので、今後協議会は
事実解明を中心に活動を続け、12月
末を目途に報告をまとめ活動を終了
することとした。そのための活動費
を関連学会が負担することになった。

(2) 担当理事の報告

事務局：地域研究企画交流センターが廢
止され、京都大学に新設される「地域研
究統合情報センター（仮称）」に統合され
ることになり、新センター設置に関する
推薦状の送付依頼があったので、理事長
名で7月13日付推薦書を送った。

- ・地域研究コンソーシアムの新地域形成
に係る海外調査に会員4名が派遣され
た。

- ・年報バックナンバーを6大学図書館に寄
贈した。残部の処理については改めて
検討することとした。

- ・会費は順調に納入されている。会費未
納者の取扱いは、会費納入者を対象に
選挙人名簿を作成する来年1月末時点を
目途に、規定に則り対応策を検討する。

研究部会：東日本、中部は12月10日、西
日本部会は12月3日に開催予定。

年報編集：第26号は、投稿原稿、定期大
会での記念講演、編集委員会による依頼
原稿を掲載する。匿名審査制度について、
査読用フォーマットの作成を検討する。

国際交流：ラテン・アメリカ協会の存続
について外務省と協議したが、補助金打

ち切りによる来年度廃止が撤回されることは困難である。47年間にわたる活動に鑑み、学会としての存続の要望書を12月までに作成し、外務省に提出する。

学術会議：10月1日第20期学術会議が発足。研究連絡委員会は廃止となり、分野別委員会と課題別委員会が新たに発足し、本学会は後者の地域研究委員会に属することになる。

・7月25日から8月3日開催のCELAOメルボルン会議に小泉・堀坂理事、山田会員が出席。FIEALCとCELAOの日本連絡会議委員長に小泉理事が就任した。会計：26回大会の収支報告の結果、次年度への繰越金は17万円となった。

<審議事項>

- (1) 入会申請6名について1名を除く5名を承認。退会2名が承認された。
- (2) 連絡協議会の活動に対するカンパ(2000円)の支出が認められた。
- (3) 地域研究企画交流センターの改編にともなう推薦書の発出が承認された。
- (4) 学術会議の改革にともない、文化人類学・民俗学関連学会協議会(仮称)に参加することが承認された。
- (5) 次期大会実行委員会の構成が承認された。星野妙子、宇佐見耕一、坂口安紀、清水達也、村井友子、上谷直克(以上、アジア経済研究所)、子安昭子、高木耕(以上、神田外国語大学)の各会員。
- (6) 次期理事選挙について、理事長から提案された選挙管理委員会の構成案が承認された。飯島みどり、牛田千鶴、宇野健也、後藤雄介、田島久歳、箕輪真理の各会員。
- (7) 会員名簿作成について、個人情報保護法との関連を踏まえ継続審議とし、次回理事会を目的に作業手順を確定することとした。
- (8) 外務省招聘者との懇談について、国際交流担当の松下理事より、学会が公式の受け皿となることについて提案がなされたが、慎重に対応すべきとして継続審議となった。

(9) 地域研究コンソーシアムの新地域形成プロジェクトに係る国際シンポジウムを後援することが承認された。

(10) 次回理事会開催は2006年2月4日(土)。

大会発表要旨に対する会員からの指摘

『会報』87号(2005年7月15日号)に掲載された第26回定期大会発表に関する竹村卓会員の要旨(同号9頁、右段・上)について、事実と異なる内容が記されているとの指摘が、2005年10月24日付けで小澤卓也会員よりありました。同要旨は、小澤会員が「科学的社会主義者を自称される立場」にあるかのごとく読めるが、これは事実と反すると認識したとのことです。

(会報編集委員会)

2. 第27回定期大会開催について

第27回定期大会は2006年6月3日(土)、4日(日)に千葉市美浜区のアジア経済研究所(JETRO)で開催致します。発表を希望する方は、2006年1月31日(必着)までに、氏名、所属、パネル・個人発表の別、発表テーマを明記の上、以下にお申し込みください。できるだけe-mailでの送付をお願い致します。

あて先：

〒261-8545 千葉市美浜区若葉3-2-2

アジア経済研究所(JETRO)

地域研究センター 宇佐見耕一気付

日本ラテンアメリカ学会

第27回大会実行委員会

e-mail：usamik@ide.go.jp

また、シンポジウム案および招聘講演者の候補などがありましたらふるってご提案ください。なお、こちらについては12月15日までに宇佐見実行委員までお寄せください。

3. 研究部会開催のお知らせ

以下のとおり各研究部会を開催いたします。多くの会員のご参加をお願いします。

○ 東日本部会

日時：12月10日（土）13:30から17:30

場所：早稲田大学西早稲田キャンパス14号館10階1060

報告者および題目：

上谷直克（アジア経済研究所）「“国家コーポラティズム（論）”の呪縛？」

大村香苗（お茶の水女子大学・院）「マヌエル・ガミオと日本」

Eli Bartra (Universidad Autónoma Metropolitana-Xochimilco, México, お茶ノ水女子大学ジェンダー研究所客員教授) "Pinceladas sobre Frida Kahlo".

John Mraz (Universidad Autónoma de Puebla, México) "Looking for Mexico: Modern Visual Culture and National Identity".

連絡先：畑恵子 hata@waseda.jp

○ 中部日本部会

日時：12月10日（土）13:00から17:00

場所：南山大学名古屋キャンパス J棟

報告者および題目：

牛田千鶴（南山大学）「米社会におけるラティーノの勢力拡張と“イングリッシュ・プラス”政策—フロリダ州とニューメキシコ州の事例—」

河邊真次（南山大学 大学院博士課程）「ペルー共和国における社会変化のメカニズム解明に関する一考察 —プロテスタント諸派及びNGO等の外的影響を手がかりとして—」

連絡先：加藤隆浩

donkato@nanzan-u.ac.jp

○ 西日本部会

日時：12月3日（土）14:00から17:00

場所：京都外国語大学・京都ラテンアメリカ研究所（国際交流会館5F、TEL 075-312-3388）

報告者および題目：

小林貴徳（神戸市外国語大学大学院）「再生産される聖人信仰」

松久玲子（同志社大学）「メキシコ革命期のユカタン・フェミニズム会議と女子教育」

*なお、今回の西日本研究部会は「ラス・アメリカス研究会」との共催です。

連絡先：辻 豊治 t_tsuji@kufs.ac.jp

4. 学術交流

○ CELAOおよびFIEALC大会報告

(1) CELAO第1回メルボルン大会に出席して

7月14日から16日まで3日間にわたり、メルボルンでラテンアメリカ研究アジア・オセアニア審議会（CELAO-Consejo de Estudios Latinoamericanos de Asia y Oceanía）第1回大会が催された。会場は市郊外にあるラ・トロブ大学であった。参加者は130名程度であった。当然のことながら、オーストラリアとニュージーランドの二国間で活動していた既存のAILASA: Asociación de Estudios Ibéricos y Latinoamericanos de Australasiaの関係者の参加が圧倒的に多かったが、メキシコ、米国、中国、台湾、フィリピン、マカオ、日本（小泉潤二、堀坂浩太郎、山田などの会員）、などからも少数ながら参加が見られた。物理的距離と開催時期が参加者数に影響するが、日本からの参加者が少なく、残念であった。

この学会の公用語は、スペイン語、ポルトガル語、英語とされているが、今大会では、土地柄か英語の発表が圧倒的に多く、私自身、開会式での会長演説は、開催校の学長のあとでもあり、英語で話した。ただし、総会で議長を務めた際には、今後の慣例とするためスペイン語で話した。

分科会は、学内の近接する2会場で行われたため便利であった。セッションの間には15分の英国式ティーが用意され、社交とくつろぎに役立った。夕食は、2、3のホテルから各自近くの目抜き通りのレストランに

出かけることになったが、イタリア料理をはじめ様々なエスニック・レストランが利用できた。市内の指定ホテルとかなり離れた会場との往復には、1台のチャーター・バスが手配されていた。

大会のメイン・テーマは特に設定されていなかったが、オーストラリアとニュージーランドにおけるラテンアメリカ研究の水準と多様化を反映して、分科会の構成に堅実さが感じられた。番号順に紹介すると、1Aメソアメリカ考古学(1)、1Bブラジル、ティモールとマカオ：アジアにおけるポルトガル語世界、2Aオーストラリア、ニュージーランドおよびラテンアメリカ：比較研究と出会い、2Bラテンアメリカにおけるメディア、3Aラテンアメリカ・アジア間の貿易、投資および政治関係、3Bグアテマラおよびラテンアメリカにおける暴力、平和およびテロリズム、4A帝国内の緊張と脱植民地化、4B発展、5Aメソアメリカ考古学(2)、5Bメキシコ、ブラジルおよびアルゼンチンにおける暴力と社会運動（山田は、ブラジルの都市暴力について英語で発表した）、6A不平等、貧困および社会保障：グローバリゼーション内の緊張、6B文学、映画およびプレス、7Aメキシコ史、7B「隠れた」ラティーノたち—オーストラリアにおけるラテンアメリカ人に関する研究現況、8Aメキシコおよびラテンアメリカにおける虐げられた人々 (Los de abajo)、8Bラテンアメリカとの関係、9Aラテンアメリカにおける環境、9Bラテンアメリカにおける民衆文化、10Aコノ・スル、10B今日のブラジルの諸問題。基調講演として、Mario Rapoportによる "Historical Perspectives on the Argentine Crisis" があった。予算的な制約もあり、基調講演者を多く招聘できなかったように見受けられた。

この学会は、2年前の大阪でのFIEALC第11回大会の開催を契機に設立され、今回がその第1回大会となった。その意味で、今大会の成功は、新生のCELAOの今後の順調な発展を予感させるものであった。なお、次回の大会は、2007年7月後半にソウルで行われることになった。

(2) FIEALC第12回ローマ大会に出席して

9月27日から30日まで4日間にわたり、ローマでラテンアメリカ・カリブ海研究国際連盟 (FIEALC: Federación Internacional de Estudios sobre América Latina y el Caribe) の第12回大会が開催された。会場は、ヴァティカン市国の西、ヴィア・アウレリア沿いのエルジフェというコンベンション・ホテルであった。参加者は、300名強であったようだが、日本からは、関雄二、松下マルタ、浅香幸枝、今井洋子、ウシ・アラカキ、山田などの会員が参加した。原則として、全員が会場のホテルに宿泊し、食事も開催機関が提供したので、分科会以外にも、3度の食事のたびに多くの人と歓談する機会に恵まれた。

大会のメイン・テーマは、「ラテンアメリカ近代化の過程」とされ、当初は先スペイン期、発見、征服、植民地時代など歴史学会であるかのような柱のみが立てられており、参加者を限定してしまうのではないかと危惧した。実際には、多くの参加者が公式テーマとは無関係に自分の研究課題を提出したので、歴史以外にも、民主化、人権擁護、ポピュリズム、カトリック教会の役割とシンクレティズム、農鉱業、技術過程、環境、グローバリゼーションと国民アイデンティティなどの分科会の柱も立つ結果になった。しかし、これらの柱の立て方には、近代化との関連で今日の重要課題でまとめるなど、一貫した方針が感じられなかった。私自身は、やや場違いな民主化に関する分科会でブラジルの都市暴力について、ポルトガル語で発表した。

基調講演として7件が予定されていたが、キャンセルが多かったことと、特定の時間帯に設定されていなかったことが惜しまれた。とくに感銘を受けたのは、ポツダム大学のOttmar Étéによる "El recorrido científico de Alejandro de Humboldt entre Europa y América" という長年の調査に基づく講演だったが、話をしながら一度も原稿を見ないので、よく内容を把握している職業的な講演者であろう、と感心していた

が、あとで全盲者であることを教えられた。なお、ドイツでは、視力障害者の調査研究を支援する体制が整っているそうである。

初日午前中に都心Torre della Argentina近くの16世紀後半のバロック様式のPalazzo Santacroce（開催機関IILA: Istituto Ítalo-Latinoamericanoの本部）の講堂で開会式が行われた。この建物は、フィレンツェの貴族サンタクロッチェ家の邸宅を買収転用したもので、研究所の図書館や客員宿舎も付属している。開会式では、私が会長として演説を行い、特定地域にかぎらず全世界の各地で国際会議を開催できる連盟の利点、外国人が地域研究で行う貢献、社会人文諸科学のディシプリンと学際的な地域研究の間の相互作用と統合の必要性などを強調した。実行委員長カンパ氏は、メインテーマに関して、約45分の講演を行った。なお、連盟は、LASAに対抗して設立されたため、公用語は、スペイン語、ポルトガル語、英語であるが、実際にはスペイン語が主流である。

総会では、私が退任会長として議長を務めさせられた。今回注目すべき議事としては、1982年の連盟創設以来、事務局にあたるメキシコ国立自治大学のCCyDEL: Centro Coordinador y Difusor de Estudios Latinoamericanosを主導し、昨年物故されたレオポルド・セア博士の長年の貢献尽力に対する感謝状、同機関で国際関係部長を創立以来務めてこられたセア夫人に対する感謝状の贈呈、連盟の元会長たちから構成される会長事務室のための諮問委員会の創設決議、国際大会開催間隔の柔軟化（開催機関の都合と他の関連国際会議との重複回避のため、現行の2年を2年ないし3年とする）決議などがあった。今回の実行委員長リカルド・カンパ博士が慣例どおり次期会長に選出された。

次期大会は、中国のマカオ特別行政地区で2008年初頭に開催されることになった。最後に実行委員長より私に対して、大阪大会におけるCELAO創設の功労を理由とする表彰状が授与された。

観光都市ローマでの大会ではあったが、

郊外のホテルを使った催しであったので、移動の必要がなく、参加者間の交流の機会が多かったことなど良い面も多く見られたが、他方、実行委員会が事実上委員長のみであったこと、動員された要員の少なさに起因すると思われる不備、プログラムの変更に関する連絡の不足なども感じられた。全体としては、大会を利用して期間の前後に市内や他都市への観光旅行に出る人も少なくはなく、満足している人が多く、概して成功であった、と評価している。

CELAOとFIEALCの次期大会は、いずれも期せずしてアジアで行われることになった。前会長としてかかわった立場から、日本のラテンアメリカ研究の進展に対する両国際学会の意義を確信しているので、会員諸氏の積極的な取り組みと参加をこの機会にとくにお願いしたく思う。

（山田陸男 FIEALC第11回大阪大会実行委員長、FIEALCおよびCELAO前会長）

○グアテマラとの学術交流

国際交流基金の「日本研究員教授派遣プログラム」において、8月14日から22日までグアテマラ共和国を訪問し、私立ラファエル・ランディバル大学の経済経営学部の修士課程において"Japón: economía, negocios, y política"（日本：経済・ビジネス・政治）と題した集中講義（20時間弱）を行いました。

本講義のために、受田宏之会員の協力を得て、200枚強のスペイン語でのパワーポイント資料を作成しました。今後の学会員の同種の活動においてご参考に資すれば幸いですと考へ、インターネットでのアドレスをお知らせします。ご質問等はメールでお願いいたします。

<https://rdarc.itakura.toyo.ac.jp/webdav/hisamatsu/public/guatemala/>

久松佳彰（東洋大学）

yhisamat@itakura.toyo.ac.jp

5. 近著紹介

村上勇介著『フジモリ時代のペルー—救世主を求める人々、制度化しない政治』
2004年、平凡社、586頁。
紹介者：岸川毅（上智大学）

本書はアルベルト・フジモリが1990年に政権に就いてから2000年に解任されるまでの過程を分析した大著である。制度の構築という一貫した視点のもと、フジモリ大統領とその側近、野党勢力、国民の間で展開される政治過程と力学が、フジモリ自身の認識や判断にまで踏み込んで検証される。

まず第1章「ペルー政治への視角」では、社会構造や政治史の概観の後、ペルー政治の諸原理として、植民地時代の階層秩序に由来するパトロン-クライアント関係、「救世主」を求める国民の政治意識と結果重視のクリオジョ文化のもたらす民主主義的手続きの軽視、指導者中心で党内民主主義を欠き一般国民との関係も希薄な政党、政党間の建設的な協力の欠如などが解説される。「民主化後」もこれらの問題は克服されず、旧態依然たる分裂的政党政治が続くなか、社会はますます混乱と原子化の度合いを強め、ここにフジモリ政権誕生の余地が生じたと分析する。

以後の章では、こうしたペルー政治の歴史的特質とフジモリの政治手法がいかに共鳴し合ったかが明らかにされる。第2章「フジモリ政治の胎動」では、その生い立ちから学長を務めた国立農科大学での学内政治の経験を追って、フジモリの行動にはクリオジョ的な発想や、状況対処的な事の進め方、組織に頼らず民衆と直接的な関係を打ち立てるリーダーシップのとり方などが早い段階から観察できたと指摘する。そして1990年大統領選挙での予測を超える成功が、こうした政治手法への自信を強化したと分析する。

第一期政権を扱った第3章「フジモリ政権の発足から憲法停止措置の取捨まで」（1990～92年）と第4章「フジモリ再選への過程（1993～95年）」では、大統領となったフジモリが経済の安定化、国際金融社会への復帰、治安の回復と目に見える成果を挙げながら国民からの高い支持を得たのみならず、経済界、国際金融機関、軍といった新たな支持勢力も得ていく過程が解説される。一方、政府への協力を拒み現実的代替案も出さない野党側は、委任立法令を大量公布する大統領の政権運営に反発し、その権限の制約を試みたことから大統領との決定的対立に至り、事態は92年4月の憲法停止措置にまで発展する。しかし国民の圧倒的支持を受け、国際社会との合意も取り付けたフジモリは、分裂した野党勢力を尻目に、制憲議会選挙を実施し新憲法を成立

させたうえで、再選を果たすのである。

しかし第二期政権においてフジモリの政治手法は、直面する政策課題の性格の変化や、フジモリ自身に生じた権力への執着から、うまく機能しなくなっていく。第5章「第二期フジモリ政権の失速」（1995～98年）と第6章「フジモリ政権の終幕」（1999～2000年）で描かれるのは、中長期的な政策の欠如から経済運営が軌道に乗らず、雇用創出や貧困対策で成果を挙げられないフジモリ政治の限界であり、また三選実現に執着するフジモリが、批判的助言者を遠ざけ、非合法的手段も厭わない側近モンテシノスに過度に依存して判断力を失っていく姿である。三選は果たすものの、モンテシノスの不正が暴露されたことで、フジモリは失脚する。

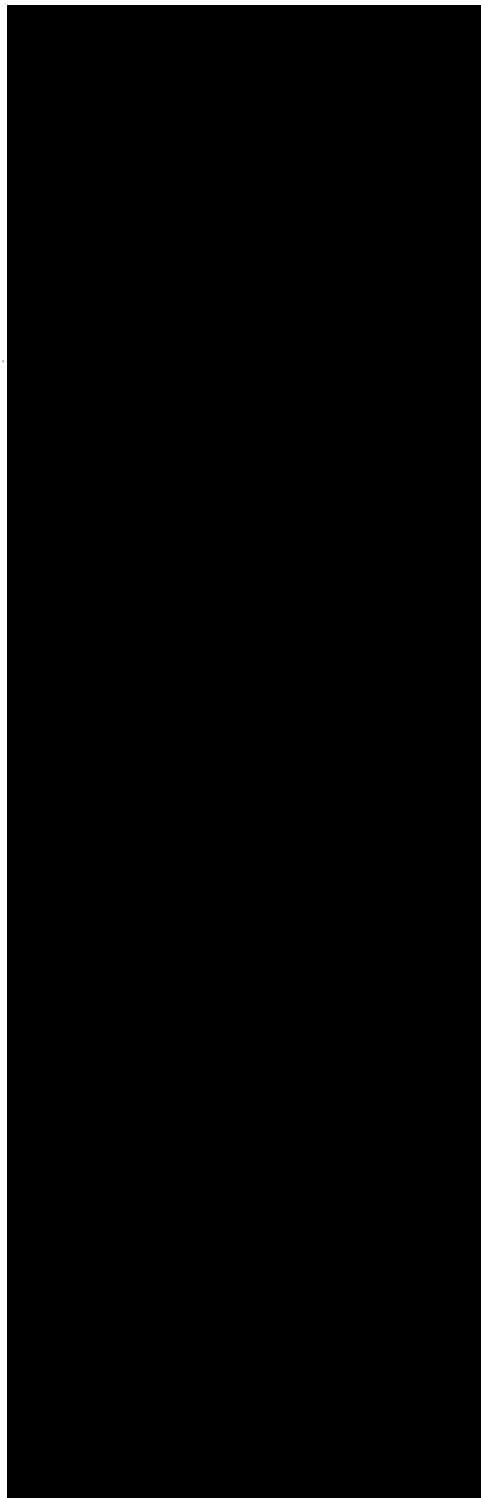
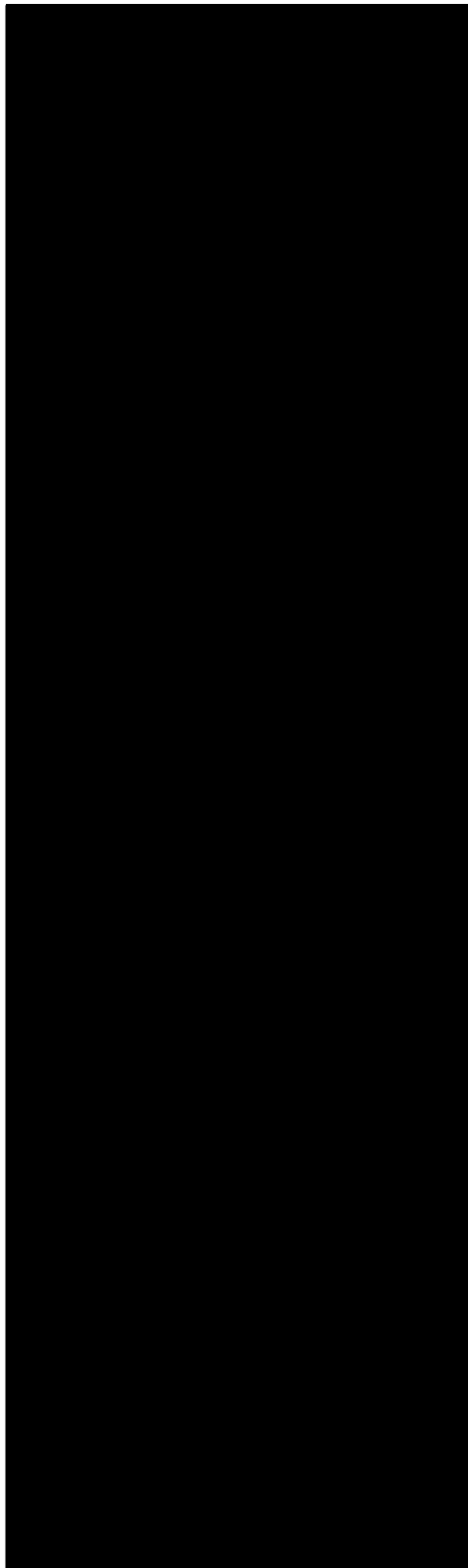
結局この時代、フジモリも野党勢力も民主主義の制度化に向けた努力を行わなかったし、国民大衆も求めなかった。「フジモリによる政治はペルーの政治社会の歴史的、構造的な特徴に強い影響を受け、それに規定される中で生まれ、展開し、最後には崩壊した」（468頁）のである。

著者はフジモリ時代の政治過程を、膨大な文献資料に加え、経済社会指標や世論調査結果を示しながら論証する。またフジモリの行動や出来事の背景については関係者のインタビューも用いて解釈していく。同国の専門家でない紹介者には個々の議論について評価する能力はないが、本書は、先行文献の徹底的検討、豊富な論拠の明示（したがって反証可能性の担保）、体系的な構成といった点で、根拠が不明確で党派色の濃い情報の多かったフジモリ時代の政治について、堅実で一体性のある説明を与えている。同時に、民主主義制度の非構築というペルー政治の性格を徹底的に炙り出している。今後、ペルー現代政治の基本文献として長く参照されることになろう。

ところで終章には、制度化の度合いに関して他のラテンアメリカ諸国との比較可能性を短く論じた部分があり、綿密な比較は今後の課題とされている。実は他の国の専門家が本書を読んで抱くひとつの問いはこれではなからうか。フジモリ政治はペルー的ともラテンアメリカ的とも形容できそうだが、両者はどのように区別され得るのか。ラテンアメリカ地域の政治研究者が抱える二重のアイデンティティについて改めて考える機会ともなった。

6. 事務局から

I. 会員関係 (a b c順)



II. 寄贈図書

- アルベルト松本『アルゼンチンを知るための54章』明石書店 2005年
- 中川文雄・山田陸男編『植民地都市の研

究] JCAS連携研究成果報告 8 国立民族学博物館 地域研究企画交流センター 2005年

- エレナ・ポニアトウスカ (北條ゆかり訳) 『トラテロルコの夜 メキシコの1968年』 藤原書店 2005年
- 上智大学イベロアメリカ研究所『イベロアメリカ研究』通巻52 2005年度前期

地域統合をテーマに 国際シンポジウム開催へ

ラテンアメリカの地域統合をテーマとした国際シンポジウムが来年3月28日(火)上智大学を会場に開催される。主催は、地域研究企画交流センターおよび上智大学イベロアメリカ研究所で、地域研究コンソーシアムの関連プロジェクトとして本学会も支援している。

シンポジウムのタイトルは、「連携するラテンアメリカ諸国—経済統合と安全保障」(New Linkages in Latin America: Economic Integration and Regional Security)。「ラテンアメリカにおける信頼醸成」「ラテンアメリカのエネルギー・インフラ統合」「ラテンアメリカにおける経済統合の現状」「ラテンアメリカにおける経済統合の課題」の4つのセッションで構成され、招聘するECLACのJoão Carlos Ferraz、FLACSOのFrancisco Rojas Aravena、ブラジル経済社会開発銀行のErnani Torres Filho、Universidad de Los AndesのJosé Briceño Ruiz、国連大学のPhilippe De Lombaerdeおよび新地域形成に係る海外調査(理事会議事録参照)に従事した会員を中心とする本学会員の発表、フロアーを交えた意見交換が予定されている。

会場は上智大学(東京都千代田区紀尾井町7-1、東京メトロ・JR四谷駅から徒歩5分)L号館911号室。問合せは同イベロアメリカ研究所 Tel: 03-3238-3530。

会費納入のお願い

2005年度の会費を未納の方はお納め願います。前号にて郵便振替用紙を同封しましたが、必要な方はご請求ください。

なお来年度初めには、理事選挙が実施されます。理事選挙規則(第3条)によると、来年1月末までに会費を完納した正会員が、選挙権、被選挙権を有することになります。

また会則(第11条)によると、会費を連続して2年間、無届にて滞納した場合は、理事会の議決をもって除名することがあります。2004年度分までに未納がある会員は、未納分を含めてお納め願います。

郵便口座番号: 00140-7-482043
加入者名: 日本ラテンアメリカ学会

編集後記

日本は紅葉をめでの季節となった。国際メディアの注目の的となった米国ハリケーン被害もすでに記憶から遠のきつつある。一方、中米・メキシコを襲ったハリケーン・スタンによる惨事はほとんど伝わってこない。グアテマラでは死者・行方不明者合わせて1500人以上(政府発表10月末日)、周辺諸国を含む被災者は4万人を越えるといわれる。情報技術がグローバル化を促した今日、メディアにのらない弱者にこそ関心を寄せるべきではないだろうか。 幡谷則子

No88 2005年11月20日発行
学会事務局

筑波大学大学院人文社会科学科研究科
現代文化・公共政策専攻

遅野井 茂雄研究室

〒305-8571 つくば市天王台1-1-1

T E L 029-853-6534

F A X 029-853-6502

E-mail : osonoi@social.tsukuba.ac.jp